



第 54 号

編集・発行

信州大学附属図書館

繊維学部図書館

平成17年9月30日

CONTENTS

脳を活性化させよう			
脳について(2)	信州大学名誉教授	近藤 慶之	(2)
木曾義仲と参上神社	機能高分子学科	太田 和親	(6)
手塚の唐糸と万寿姫の物語	機能高分子学科	太田 和親	(9)
特別展「2004 上田地方の古代・ 中世の仏教文化」を見て	機能高分子学科	太田 和親	(13)
図書館通信	告知板		(15)
	図書館日誌		(15)
編集後記			(15)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。

URLは <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html> です。

「脳を活性化させよう」

—脳について(2)—

信州大学名誉教授
近藤慶之

人の心

人間の心が脳からどのように生じるかは昔から大いに関心のあるところであるが、脳の構造と作用機序の関係がかなりわかってきましたので、“人の心は人の脳から生じる”といえます。

人間の脳の活動は人間の脳内分子の活動であって、心といっても人間の脳の活動である限りは脳内分子の活動によって解けるものと考えられます。

心はすべて生命をつくったタンパク質分子の分解によって創られます。「意」は欲から創られ、欲はタンパク質分子を分解したオリゴペプチドによって創られます。「知」はアミノ酸分子によって創られ「情」は無毒のアミノ酸分子を一工程分解しただけで創られる猛毒なアミン分子によって創られます。心は人間の脳から生じる一つの情報であり、脳の活動の一つで、脳内分子の中でもとてつもない情報をもったタンパク質分子を分解、利用しています。

食欲と性欲

欲は個体維持のための食欲と種族維持のための性欲があり視床下部(5g)から生じます。大脳について重要といわれている脳の漏斗(じょうご)の上皿部分は、さらに小さな十数個の脳から成り立っています。その一つが食欲の脳・摂食中枢で、一つが性欲の脳・性中枢であります。性中枢の中で性欲を起こさせる物質は、生命をつくったタンパク質をほんの少しだけ分解した小型のタンパク質分子でありアミノ酸10個結合したオリゴペプチドと呼ばれます。食欲についても同様な小型タンパク質があるものとされていますが未だ確認されていません。性欲を起こさせる分子は1960年代に発見され、性腺刺激ホルモン放出ホルモン(GnRH)といわれます。女性の場合は脳下垂体に働きかけて卵巣の排卵後に黄体ホルモンを分泌させるなど性周期をつかさどるので発見当初は、黄体化ホルモン放出ホルモン(LHRH)といわれていました。欲のそもそもの素はアミノ酸3個結合した甲状腺刺激ホルモン放出ホルモン(TRH)であり、このGnRH、

TRH の発見をした R.ギルマンと A.シャリーは 1977 年にノーベル賞を受賞されています。人間の欲は TRH が創り、性欲は GnRH が創る。GnRH は TRH のほぼ 3 倍のアミノ酸からできているため情報量が多く、欲を性欲という一分野に特定することが可能になったと考えられています。

情報効率化を生み出す電線細胞

生物の起源をさぐってみると、約 35 億年前に単細胞の微生物として地球上に誕生しました。その後、約 12 億年前によりよい効率を求めて、細胞同士が互いに連絡をとりあうようになりました。小型タンパク質でできた体内情報伝達物質(ホルモン=ギリシャ語でさますものという意味)を使って、細胞が相互に連絡しあい、菌類、植物、動物などの多細胞生物に進化しました。多細胞生物といっても色々バラエティーに富んでいます。菌類は寄生生物だからすべてを寄生に求めるという気楽な生物といえます。植物も日光のエネルギーを直接利用できる光合成細菌を葉っぱの中に葉緑体として共生できるので、動かずに葉を太陽に向って広げていればエネルギーに不足しないという気楽な生物であります。一方、動物はそんな気楽なことをいつているわけにはいかず、動いてエサを求めなければ生きていけません。そこで、しかたなく筋肉という収縮運動をする細胞と、その細胞を正しく運動させるように迅速、正確に連絡する神経という電線細胞を発達させたのであります。

電線細胞は、体内情報伝達物質ホルモンを分泌するホルモン分泌細胞が、情報を瞬時にしかも的確に送るために、パルス波の特別な電流で情報を連絡しあう電線となった神経細胞であります。

裸電線の原始的な無髄神経で生きている腔腸動物、軟体動物、節足動物などがいます。さらに、脊椎動物になると優秀な絶縁被覆である髄鞘(ずいしょう)をかぶった被覆電線(有髄神経)に進化したわけです。情報伝達速度で比較してみますと、ホルモンは数 cm/秒、裸電線の無髄神経は 1m/秒、被覆電線の有髄神経では 100m/秒で音速に近いのです。

神経という電線と化した細胞が大脳皮質だけで約 140 億個集まったスーパーコンピューターなるものが人間の脳なのです。さらに、神経細胞は脳というスーパーコンピューター用の電線となってしまった特殊な細胞であり、細胞分裂、細胞増殖もできず、栄養をとることもできない不完全な細胞であるといえます。このため、脳の中には神経細胞へ栄養を与えたり、神経細胞の絶縁被覆をつくり進化した有髄神経にしたりする特別な栄養細胞があるのです。この栄養細胞は脳内神経を膠(にかわ)のように固めているのでグリア細胞(和名は神経膠しんけいこう=細胞)といわれています。細胞は分裂するとき、まず神経細胞とグリア細胞に分裂し、さらに分裂を繰り返して、億、兆という莫大な数の人間の脳をつくる神経細胞とグリア細胞になるのであります。今回のお話を含めて「脳」について、わかり易くまとめておきましょう。

脳とは

- 140 億個の神経細胞とそれ以上のグリア細胞(神経細胞の間を埋めている細胞)からなる



頭(脳)の大小、良し悪しによらない 新陳代謝は行われぬ(使いきるのみ)

- シナプス(神経細胞が伸びていって隣接する神経細胞と伝達機構を構築する)

→この網の目の多寡が脳の能力を決定する一つの因子



新生児(3ヶ月)では、1分間に5万個のシナプスが出来(情報の固定)

17~18歳頃まではシナプス形成があるが、それ以後は脳の老化が始まる

- 無限に近い可能性

遺伝情報 : DNAの長さは2m→アミノ酸としての情報は約50億ビット(親からもらった物で後天的に変えることはできない)

脳細胞のスイッチ(シナプス)機構→ $2^{1000000000000000}$ (カール・セーガン)

(ごく一部しか使っていない→頭の訓練により変えることが出来る)

木曾義仲と参上神社

随筆 2004年7月5日

長野県上田市在住 太田和親

近頃、私は土日に暇があれば、上田市内の神社仏閣の由来を尋ねて回っています。また、家にいるときは平家物語などの古典を読んで楽しんでいます。最近、平家物語に近所の丸子町や上田市など東北信に関係することが出ていて大いに注目しています。以下注目しているところの要約です。

平家物語 卷第四「宮御最期」の段より

治承四年(1180)、後白河法皇の皇子の高倉宮(以仁王)が平清盛討伐のためクーデターを起こした。平家討伐の宣旨は全国に伝えられた。しかし、宮は京より奈良に向う途中平氏に追いつかれ討死した。

平家物語 卷第六「横田河原合戦」の段より

寿永元年(1182)九月、木曾義仲は依田城(小県郡丸子町)を出て、横田河原(長野市篠ノ井横田)で僅か三千の兵でもって、平家方の城四郎長茂(越後国支配)率いる四万の兵を破った。この時、義仲軍は、わざと平家の印の赤旗をあちらこちらに掲げ、平家軍を油断させ自陣深くおびき寄せて、これを討った。

平家物語 卷第九「木曾の最期」の段より

木曾義仲は、栗津(滋賀県)で追いつめられ、残り五騎となったとき女武者巴御前を逃がし、最後には乳兄弟の今井四郎兼平の二騎となって壮絶な死を遂げる。兼平は義仲に松の木の下で自刃を勧め防戦した。義仲は泥田の深みで動けなくなり自刃できず討死した。それを見た兼平は、これが忠義の侍の死に様とあって、口に剣をくわえて馬から飛び降り自害した。巴は兼平の妹で、義仲の恋人、兼平は、義仲と竹馬の友で乳兄弟であった。

以上が私が感動し注目しているところです。義仲は平家討伐の宣旨を、現在の上田市の隣の丸子町の、依田城で聞き蜂起する決心をしたようです。「横田河原合戦」については、後年、真田氏が僅か二千五百の兵で三万八千の徳川秀忠の軍を、ここ上田の地で破ったのに酷似しています。これは今も上田市民の誇りですが、それより約四百年前にも全く同じことがこの東北信の地方であったんですね。東北信(=上田・佐久地方と長野市辺り)は日本の国が乱れると必ずここで大きな戦が古代から行われることを知りました。平将門の乱(上田の国分寺と科野大宮が戦火で焼失)、横田河原合戦(源平の戦い)、上田原合戦(武田信玄と村上義清)、川中島の戦い(武田信玄と上杉謙信)、上田城の戦い(真田氏と徳川氏)。東北信は、二百年あるいは四百年ごとに戦場になっています。地政学的に東日本から京都

へ上る道筋に古代からあり、それが東西の衝突の場所となっているようです。関ヶ原に似ています。関ヶ原も有名な関ヶ原の戦いよりもずっと以前にも、天下を二分する戦いが行われています。壬申の乱です。これも東西対立の地政学的な衝突場所となりやすいためでしょう。また、「横田河原合戦」で初めて知ったことがあります。源平の合戦では、平氏は赤旗を旗印にし、源氏は白旗を旗印にして戦っています。これが今も、紅白歌合戦や、剣道や柔道の審判が使う赤旗と白旗の起源だそうです。小学校の運動会で、小学生が紅白帽子をかぶり「赤勝て、白勝て」と応援しますが、これは源平の合戦だったのですね。私は「平家物語」を読むまで、全く知らなかったです。

さて話は少し変わります。最近市内を散歩中に見つけたのですが、木曾義仲が上田市内の参上神社(別名:荒神宮)で、戦勝祈願をしていることを初めて知りました。以下は神社前に書かれていた縁起の要約です。

上田市諏訪形の「参上神社由来」より

治承四年木曾義仲は、以仁王の平家討伐の宣旨に呼応して挙兵を決意し、上田の参上神社に戦勝祈願をした。そして今井蔵人豊成にこの神社に永代奉仕するように命じた。

驚くべきことに、824年もたった現在も、宮司さんは今井氏のようにです。義仲の命令をこんなに長く守っているのは、ギネスブックもあるいは世界遺産ものだと私は思います。でも上田市民にさえほとんど知られていないのが残念です。ところで、この宮司さんの今井氏に聞いてみたいことがあります。御先祖の今井蔵人豊成は、平家物語で全国的に有名な今井四郎兼平と巴御前とどういう関係だったのでしょうか、兄弟のように思いますが。もしそうだったら、歴史に埋もれていますね、ものすごいことですね。今も今井四郎兼平の親戚が上田に住んでおられるのですね。感動的です。私は平家物語の、兼平が口に剣をくわえて馬から飛び降り自害した壮絶な場面では、感動して思わず涙が出ました。一人当千の女武者巴御前を義仲が逃がす場面もあまりに感動的です。巴御前は近江の粟津を逃げて、ここ信濃の参上神社に身を寄せたのでしょうか。

さて、平家物語は京の都の貴族出身の人が書いたそうなので、源氏の木曾義仲を田舎者扱いして侮辱的に書いているのが少し許せない気がします。義仲は一時、頼朝、平家の三者で日本国を三分する程のつわものでしたから、大変な武将であったことは事実でしょう。義仲は、横田河原合戦から破竹の勢いで京まで攻め上ります。従って、上田市の参上神社に戦勝祈願をし、丸子町の依田城を出て、長野市篠ノ井の横田河原に向う時が、源平合戦の長い戦の始まりと言っていいでしょう。上田市の参上神社や丸子町の依田城は歴史的に重要な場所と思われます。依田城は平家物語に出ているのでよく知られていますが、参上神社は全く知られていないのが、私には残念です。もし義仲が頼朝に勝ってここ上田に最

初の幕府を開いていたら、この参上神社は幕府直轄の神社となり、鎌倉における鶴岡八幡宮と同じように大神社になっていたのではないのでしょうか。小さな参上神社の前で私は一人たたずみ空想を巡らしました。

手塚の唐糸と万寿姫の物語

随筆 2004年9月10-16日

上田市在住 太田和親

皆さん「日本史で西暦 1192 年には何が起こったでしょう？」と問われたら、中学生以上ならほとんどの人が「いいくになろう、鎌倉幕府」とすぐ答えられるだろう。ほとんどの日本人が知っている歴史的な大変革が起こった年号である。貴族の時代が終り武士の政権が初めて出来た。そしてその後約七百年の間、武家が政治を行った。鎌倉幕府はその武家政治の始まりである。私はその動乱の時代のことを描いた前々から読んでみたいと思っていた「平家物語」を最近になって初めて全巻読み通した。何度も感動して泣いた。最高の文学だと思った。また「平家物語」で初めて知ったのが、源平の合戦で大活躍した木曾義仲はひょっとしたらこの武家政権の最初になっていた可能性が高いことだった。そこでもっと別の本も読んでみると、唐糸という人が頼朝の暗殺にも成功していたら、きっと初めての武家政権は義仲によってこの信州の現丸子町か上田市に開かれ「丸子幕府」か「上田幕府」が出来ていたのではないかと私には思えてきた。この空想が現実だったら、今の日本中の中学生や高校生は「いいくになろう、上田幕府」と覚えているだろう。

唐糸の手により頼朝が義仲よりも先に死んでいたら、歴史は大きく変わっていただろう……。そんな訳ないと思う人は上田市手塚の唐糸観音堂とその父手塚太郎の墓を訪ねてみて欲しい。源平の合戦はこの東信（東信濃）地区から始まったのを皆さん知っているだろうか。最近、私は源平の合戦や「平家物語」に関係する史跡が上田やその周辺に沢山あることを知った。そこで、その史跡を順次訪ねてみようと思いこのお盆の休みにまず上田市の塩田平にある「唐糸観音堂」と「手塚太郎光盛の墓」を手塚地区を訪ねた。しかし、そこでは観光案内板もなく全く探し出せないで困ってしまった。その日はお盆の 8 月 14 日だったので、地区の手塚公民館で明日の盆踊りの準備を地元の方がしていた。広場から出てきて自転車に乗って丁度帰ろうとした人を捕まえて、

「すみません、唐糸観音堂を探しているのですがどうしても見つかりません。どこにあるか教えて欲しいのですが……」

と聞いてみた。

「唐糸観音堂……？おりゃあ知らないなあ。公民館の中に、手塚の公民館長がいるからそっちで聞いてみて。」

それで公民館の建物の玄関から公民館長を呼びだして窓越しに聞いた。公民館館長も、

「唐糸観音堂？おりゃあ知らないなあ。」

唐糸について全く知らないようなので説明した。

「鎌倉にいる源頼朝を、この手塚出身の木曾義仲に仕えていたお父さんの手塚太郎光盛の娘唐糸が、暗殺する計画をたてていました。800 年ほど前のことです。結果的には失敗して、鎌倉で石の牢屋へ入れられていました。万寿姫というその唐糸の娘がここから鎌倉に行って、お母さんの唐糸を牢屋から助け出して、二人でここ手塚に無事帰って来たそうです。それでその唐糸と万寿姫を祀った唐糸観音堂がこの手塚にあると聞いて訪ねてきました。」

「頼朝を暗殺！？唐糸？おれそんな話初めて聞いたなあ。う～ん、おれは知らないけど近くに郷土史家の先生がいるからついておいでよ。」

ということになり、そこから二百メートル位産川の川上に上ったところで、郷土史家の曲尾勝さんを紹介された。

丁寧に公民館長にお礼を言い曲尾さんにことの次第を話した。

「手塚大城というところに唐糸観音堂があると本で読んだのですが、地図には大城というところがありません。捜しあぐねて公民館長さんにお聞きしたのですが、御存じなくお宅を紹介して頂いたような次第です。」

曲尾さんはさすがに、

「はあはあ、それはそれは、まあおあがりなさい。」

と良く御存知のようである。お言葉に甘えて突然の訪問にもかかわらずお家に上がらせてもらいお話を伺った。

手塚大城とは現倉沢正二郎氏の宅地の通称であり、地図には載っていない。そこには手塚太郎金刺光盛の館つまり大城がかつてあったところである。大正七年生れで現在 85 才の曲尾勝氏によると、「私が子供の頃の七十年ほど前までは二階建ての木造の館があった。」とのことである。この館は蚕種選業の組合の共同作業場を建設するために取り壊された。丸子町から買ってきた機械を据え付けるためであった。当時は文化財保護意識が低かったため、取り壊してしまい残念なことになった。もし取り壊されていなければ、中部地方で最も古い木造建築物であっただろう。なぜなら市内前山地区にある同時代に建てられた中禅寺の阿弥陀堂は中部地方最古の木造建築と言われているからである。

現在はこの倉沢正二郎氏宅地内には唐糸観音堂だけが残っている。この観音堂は手塚太郎金刺光盛の娘唐糸と孫娘万寿姫の二人を供養するために建てられたものである。

唐糸の話は戦前には尋常小学校の教科書にも載っていた。唐糸の物語は源平の合戦の頃平安末期の忠と孝の実話を表したものである。この話の背景と粗筋は次の通り。
(政治的背景)

治承四年(1180)以仁王の平家追討の宣旨を受けた木曾義仲は、現長野県小県郡丸子町の依田城にて東信および群馬の兵馬を集めて蜂起した。この時、義仲に従ったのは現上田市手塚の手塚太郎金刺光盛や現東御市海野宿の海野氏らがいた。兵馬は約三千騎にて依田川と千曲川の合流点付近の白鳥河原に集合した。これを白鳥河原の勢揃いという。この白鳥河原横には今も白鳥神社があり、これは海野氏の氏神として祀られている。

義仲の軍は千曲川の横田河原で越後から来た平家味方の城四郎の軍四万騎と戦って勝った。わずか三千騎で勝利した様子は「平家物語」の「横田河原の戦」の段で語られ著名である。義仲の軍は破竹の勢いで北陸道を京へ攻め上って行った。越中加賀国境の倶利伽羅峠の戦では、義仲の兵一万騎平家は十万騎であったが、地形を巧みに利用し牛の角にたいまつを付けて不意の夜襲に見せかけて平家の兵馬を深い谷底へ追い落として勝った。連戦連勝で丸で朝日が昇るごとくであったので、人々は義仲を旭将軍と呼んだ。

京に入った義仲はさらに西国の水島の戦などにより全国の三分の一を支配下に収めるに至った。

(唐糸の物語)

その頃の日本は、平氏、義仲、頼朝の三者でほぼ三分割されていた。しかし、頼朝は同じ源氏の従兄弟の義仲が先に京に入ったことを快く思わず、鎌倉から義仲殺害の指示を出した。その頃、手塚太郎金刺光盛の娘唐糸は頼朝の下で働いていた。唐糸は

これは父手塚太郎の主君義仲の一大事と、京にいる父に手紙で知らせた。「頼朝のすきを見て唐糸が頼朝の寝首を搔くので、首尾よく成功のあかつきには父手塚太郎に信濃と越後の二国を下さい。義仲様の了解のあかしに代々伝わる家宝の短剣を唐糸に下されば、それで頼朝を討って見せましょう。」父手塚太郎光盛はこの手紙を主君義仲に見せた。義仲は、唐糸の忠義を大いに喜び、家宝の名刀の短剣とともに手紙に「この度の唐糸の注進、誠にありがたい。御褒美に父の手塚に信濃と越後二国を与えよう。さらに首尾よく成功したら関東八ヶ国をもさずける。このこと人に知られるな。」と書いて鎌倉の唐糸の元へ送った。唐糸はこの短剣を肌身離さず、また、義仲の手紙は部屋に隠した。頼朝のすきをうかがうがなかなかよい機会が巡って来ない。そうこうしていると、頼朝とその妻政子のお風呂のお供を仰せつかった。脱いだ着物の下に隠しておいた短剣を、風呂奉行の土屋三郎に見つかってしまった。問い詰められ木曾殿に仕えている時に形見にと頂いたと言いつけるが、木曾殿の代々伝わる名短刀を女の持つ形見にしてはあまりに不釣り合いと、いよいよ疑いを深められ松が岡の尼寺に暫く預けられた。風呂奉行の土屋はさらに唐糸の部屋を捜索して木曾義仲の手紙を発見し頼朝暗殺計画を暴いた。そこで唐糸は石の牢屋に入れられてしまった。

信濃国手塚の唐糸の娘万寿姫は母の入牢を伝え聞き、名を隠し鎌倉に上って母を救い出す決心をした。万寿姫はお祖母さんの反対を押し切って、乳母の更級とともに鎌倉に上り名前や出自を偽り頼朝の屋敷で働いた。母の入れられた石牢を見つけ出したがどうすることも出来ない。そうこうしていると頼朝の屋敷で不思議なことが起こった。何と屋敷の中の畳のへりから松が六本生えてきたのだ。凶か吉かを占わせるために陰陽博士を呼んだ。松は千年の命ゆえ、六本も生えたのは頼朝の子孫が六千年も栄えることを意味する、吉兆であると占いが出た。そこで、祝賀の宴を開くことになった。十二人の美しい舞姫の舞いを鶴岡八幡宮の神前に奉納することとなった。舞姫は十一人まで集まったが、あと一人だけ足りなかった。そこで人にすぐれて美しい万寿姫がその舞姫になることを、乳母の更級が勧めて舞うことになった。美人の万寿姫が今様を上手に華麗に舞うと、感動の余り頼朝も途中から万寿姫と一緒に今様を舞った。翌日、頼朝は万寿姫を館に呼び出し「なんじは今様の名人だ。国は何処だ。親は誰だ。褒美に如何なる望みのものも取らせる。」と告げた。万寿姫はこの時を逃せば母を助けることは出来まい、我が命を奪われても構わないと心に言い聞かし、「実は、石牢に捕らわれの唐糸の子で、万寿姫と申します。母の代わりに私が石牢に入りますので、母を助けて下さい。」と助命を涙ながらに申し出た。その母を思う娘の孝行な心根に、頼朝をはじめ同席の全ての者が心打たれてもらい泣きした。そして、頼朝から母唐糸ばかりか娘の万寿姫も信濃と一緒に帰ることを許された。その上、頼朝からも他の多くの武士からも二人に沢山のみやげが贈られた。

信濃国手塚ではお祖母さんが娘の唐糸と孫の万寿姫の二人のことを毎日心配し、その心労の余り病の床に着いていた。二人が帰国して無事な姿を見せると、お祖母さんは元気になったという。誠に唐糸の忠義、万寿姫の親孝行のめでたい話である。

以上が曲尾さんからお伺いした唐糸の物語である。私はお話を伺いながら、「もしも唐糸が頼朝暗殺に成功していたら、日本の歴史は全く変わっていただろう。木曾義仲の武家政権が誕生し丸子幕府か上田幕府が出来ていたかも知れない。」と、心躍らせ空想した。

その唐糸観音堂と手塚太郎金刺光盛の五輪塔を、実際に訪ねるため、曲尾さんに地図を書いてもらった。地元の人でも全く知らないので案内板があるといいですねと私が言うと、「そうなんです、郷土史研究会のメンバーで、手塚の中心地に案内板を出そ

うと今言っているところです。」とのことであつた。

唐糸観音堂のある手塚大城は倉沢正二郎氏宅地の通称で、このお宅を道から入って行ってお庭を横切ると宅地の北東の隅に、観音堂が建っている。なんと個人の屋敷の中にあるという。このお宅の宅地は大変大きくて大変古い門が残っており、明治二年の上田の大規模な百姓一揆の時の刀傷が門の鴨居に残っているということもお聞きした。また、倉沢正二郎氏宅前の道を川下に向かって百メートル位行くと、堰口（せんげぐち）という地区の集会場と火の見やぐらがあるところがあり、その道を隔てた向いのお宅が樋口さんという。この樋口家のお庭に、父手塚太郎金刺光盛の墓の五輪塔（「光盛五輪塔」という）がある。これもまたなんとひとの屋敷の中にあるという。

その曲尾さんに書いていただいた地図を頼りに、ようやく「唐糸観音堂」と「光盛五輪塔」を訪ねることが出来た。倉沢家はお留守だったので黙って写真を撮らせてもらった。樋口家では奥さんにお断りして庭に入らせてもらって写真を撮った。それぞれ個人のお宅に、平安末期の文化財があるのである。えらく感動して帰って来たらもう夕方になっていた。

このように手塚地区にこれらの案内板や掲示が全くなく探し当てるのは至難の業であつた。是非早く案内板が欲しいと思う。また、「唐糸観音堂」と「光盛五輪塔」はもっと有名になっていいと思うのにはほとんどの上田市民にいや地元の手塚地区の人々にさえ知られていないのは残念である。是非、上田の観光協会か教育委員会でもっとこれらの史跡について広報と支援をしてもらいたいものである。

その後、唐糸の物語は「唐糸草子（からいとぞうし）」という名前の絵本として室町時代からあるとのことをインターネットで知った。「唐糸草子」は「御伽草子（おとぎぞうし）」の中の二十三話の一つである。御伽草子は室町時代を中心に、平安末期から江戸初期までの比較的短い様々な話を集めたものであり民衆に大変喜ばれ絵と文が付き、奈良本が有名である。つまり絵本で「文正草子」「鉢かつぎ」「唐糸草子」「ものぐさ太郎」「一寸法師」などが入っている。私も上田市立図書館で「御伽草子」を借りて読んでみた。「御伽草子」には「一寸法師」などの荒唐無稽なそれこそおとぎ話が沢山入っているので、「唐糸草子」も史実ではないように思われる方がいるそうだが、曲尾勝さんによれば手塚太郎金刺光盛も唐糸も万寿姫も実在の人々で唐糸の物語は実話である。手塚太郎金刺光盛はここ手塚の地名の由来になった人であり「平家物語」にも出てきて斉藤別当実盛を討った人としても有名である。最期は義仲と一緒に近江の栗津の戦で亡くなっている。木曾義仲が敗れたので手塚地区の手塚の人々は危険を避けるためにここからいなくなり、曲尾さんによると手塚地区に手塚という姓の家は今一軒もないとのことである。

特別展「2004 上田地方の古代・中世の仏教文化」を見て

随筆 2004 年 10 月 16-18 日

上田市在住 太田和親

10 月 16 日（土）に上田市立信濃国分寺資料館の上田市制施行 85 周年記念特別展の「2004 上田地方の古代・中世の仏教文化」を見に行った。大変印象深い内容であった。

国宝安楽寺八角三重塔の精巧な 5 分の 1 模型が見事であった。また信濃国分寺僧寺跡地から出土した精巧な屋根瓦は、奈良の東大寺のものとそっくりで、おそらく奈良から製瓦技術者が来て、技術指導と助力があったのだろうということであった。さもないとこれほど精巧なものは当時当地では出来なかったそうだ。

また、信濃国分寺所蔵の市指定文化財「牛頭天王之祭文（ござてんのうのさいもん）」は、室町時代の文明 12 年（1480 年）に書写されたもので、蘇民将来符の由来が記された古文書である。この祭文は日本中で一番古いことが最近わかったそうだ。このことに私はえらく感心した。そこで、展示されている巻物を読んでみた。この巻物の文章の中に出てくる「小丹将来」のコタンはアイヌ語ではないかと思った。コタンはアイヌ語で村という意味である。不思議だったので、資料館の人に聞いてみたが、「この話は中央アジアから日本まで広がった話で、日本固有のものではないので、アイヌ語ではないでしょう。」との話であった。

さらに、各地の蘇民将来符が展示されていて、小さな蘇民将来符のくびれたところにひもをわっかにしてぶら下げるようにしたものもあった。このひもは茅で作っているのだが、これをもっと巨大にして人が通れるほどにしたものがある。このわっかを人々がくぐり抜け、夏の疫病を追い払うという風習も日本各地にあり、輪抜けとか輪抜けの御祈祷とかいう。これも「牛頭天王之祭文」の話から日本中に広まった風習であるとのことを私は事前に知っていたので、「上田地区でも諏訪形の参上神社にありますね。」と、資料館の人に言ったら、面白い話を聞かせてもらった。大きな茅の輪ではないが、小さなわっかのひもを信濃国分寺近くのおばあさんが作って、ここでも 1 月 8 日の八日堂の縁日のとき、売っていたそうだ。「私は見たことがないですねえ。」という、「あのおばあさん、亡くなったからかなあ。」という話であった。上田でも、茅のひもで蘇民将来符をぶら下げる風習が、極最近まであったことを、私は初めて知った。

信濃国分寺資料館から帰って来て次の日、昨日もらった特別展の資料を改めて読んでいて、大変面白いことに気が付いた。資料の中に、「三枝氏先祖相伝系図(原本・山梨県大善寺所蔵)」というのがあった。以下資料の説明文を引用する。

上掲の写真は、三枝氏先祖相伝系図（部分）で、山梨県勝沼町大善寺に所蔵されている史料です。なお、この写真は「総説 上田の歴史 上田市誌 別巻」（上田市誌

刊行会発行)より、引用したものです。

甲斐国の役人の三枝守明(さいぐさもりあき)の三男、円城房有勝が信州塩田庄(庄は荘園を意味し、貴族や寺社の私的な領有地をいう)の常楽寺別当(寺務を統括した僧官)になって、塩田に来ていることが系図から読み取れ、十二世紀の後半常楽寺がすでに存在していたことが判明しました。

有勝が常楽寺の別当として迎えられた背景には、有勝の姉が信州塩田庄の有力な氏族の手塚太郎の妻として、妹も同地の今溝三郎の妻として、また幼い妹も信州浦野庄殿として塩田庄か浦野庄の在地の氏族に嫁したと系図に記され、こうした三枝氏と塩田庄の氏族との密接な関係によるものとみられています。

この史料から、「唐糸草子」で著名な唐糸の、お母さんは、甲斐の国の三枝氏から嫁いできたことも、はっきりわかる。「唐糸草子」によれば、唐糸を救い出すため、唐糸の子の万寿姫が、乳母の更級とともに鎌倉に上ろうと現上田市の手塚地区の家を黙って出たとき、このおばあさんはそのことに朝氣付いて、現在千曲市の雨宮まで追いかけていき、思いとどまるように涙ながらに諭した。孫娘の決意が固いと知ると、鎌倉までの道中、下男を一人付けてやった。そして鎌倉で石牢に入れられた娘の唐糸と、名を隠して密かに救い出そうとして鎌倉に行った孫娘の万寿姫を、毎日毎日心配して、とうとう病の床に着いてしまった。もう寿命も今日か明日かというときになって、唐糸と万寿姫が二人とも無事に帰って来たのを見て、このおばあさんは、元気を取り戻したという。「唐糸草子」に生き生きと描かれたこのおばあさんは手塚太郎の妻である。この歴史上有名な唐糸のお母さんは、甲斐の国の役人三枝守明の娘であることを、私は初めてこの史料で知った。なんだか、このおばあさんが目の前に生き生きとよみがえるように思えて、大変感動した。

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。

次号発行までのお知らせは、繊維学部図書館ホームページ

(<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/>) をご覧ください。

⇒ 館内改修工事（玄関自動ドア化、スロープ設置、トイレ改修、床張替え、壁塗替え）を実施しました。

⇒ *Scopus & ScienceDirect* ユーザトレーニング開催のお知らせ

10月28日(金) 14時～(約1時間半の予定) 大学院感性工学科棟 604 講義室
事前の申し込みは必要ありません。お気軽にご参加ください。

図書館日誌

(4月～9月)

- | | | |
|------|----------------------------------|----------|
| 5/24 | 図書委員会(第1回) | |
| 5/26 | 附属図書館館長会議
学術情報専門部会(第1回)[SUNS] | 出席者—成田委員 |
| 6/16 | 図書委員会(第2回) | |
| 6/21 | 附属図書館館長会議(第1回)
[附属図書館会議室] | 出席者—三浦館長 |
| 7/12 | 附属図書館館長会議(第2回) [SUNS] | 出席者—三浦館長 |
| 7/25 | 図書委員会(第3回) | |
| 8/8 | 図書委員会(第4回) | |

編集後記

ご覧のように、今号は読み応えのある豪華版です。ご寄稿いただきました近藤先生と太田先生にお礼申し上げます。両先生のこれら人気シリーズを心待ちにされている方も多いと思います。是非 Library パックナンバーもご覧ください。(→<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html>) 両先生の一連のシリーズを遡ることができます。

次号は来年1月発行の予定です。利用者の皆様の声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せください。係員に直接、または E-mail でのご寄稿もお待ちしております。E-mail アドレスは、jfg0100@shinshu-u.ac.jpです。